HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	三巻本『枕草子』不審本文考（一）
Author(s)	後藤，康文
Citation	北海道大学文学研究科紀要，153，1（右）-23（右）
Issue Date	2017-11-20
DOI	https://doi.org/10.14943/bgsl.153.r1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67944
Type	departmental bulletin paper
File Information	153_03_goto.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/bgsl.153.r1

三巻本『枕草子』不審本文考（一）

後藤康文

本稿は、三巻本『枕草子』の現存本文に散見される不審箇所について、それぞれしかるべき本文改訂案を提示するものである。なお、思いついたところから気ままに処理していくので、節番号の順に秩序はない。

〔凡例〕

1. 問題箇所を含む【本文】の掲示には、便宜上、松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（平九、小学館）を用いた。
2. 本稿で参照する三巻本『枕草子』の注釈書と論中における略称は次のとおりである。
・塩田良平『枕草子評釈』（学生社、昭三〇）……『評釈』
・池田亀鑑・岸上慎二・秋山虔『日本古典文学大系 枕草子・紫式部日記』（岩波書店、昭三三）……『大系』
・池田亀鑑『全講枕草子』（至文堂、昭四二）……『全講』

・田中重太郎『旺文社文庫　現代語訳対照枕冊子』上・下（旺文社、昭四八・四九）……『旺文社文庫』
・萩谷朴『枕草子解環』一～五（同朋舎出版、昭五六～五八）……『解環』
・石田穣二『角川文庫　新版枕草子』上・下（角川書店、昭五四・五五）……『角川文庫』
・増田繁夫『和泉古典叢書　枕草子』（和泉書院、昭六二）……『和泉古典叢書』
・渡辺実『新日本古典文学大系　枕草子』（岩波書店、平三）……『新大系』
・松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集　枕草子』（平九、小学館）……『新全集』
・上坂信男・神作光一『講談社学術文庫　枕草子全訳注』上・下（講談社、平一一・一三）……『全訳注』
・津島知明・中島和歌子『新編　枕草子』（おうふう、平一二）……『新編』

3.

三巻本・能因本の両系統内における本文異同に関しては、各節末の【参考】欄に掲げた。前者は、杉山重行編『三巻本枕草子本文集成』（笠間書院、平一一）に拠り、諸本の略号も同書のそれに従うが、重要な対立異文が見られない場合は、すべて「異同ナシ」とした。また、後者については、二大善本とされる学習院大学蔵本（略号「学」）と冨岡家旧蔵本（略号「冨」）のみを対象とし、松尾聰編『笠間影印叢刊　能因本枕草子　学習院大学蔵』上・下（笠間書院、昭四六）および柿谷雄三・山本和明編『冨岡家旧蔵　能因本枕草子』（和泉書院、平一一）に拠って異同を示した。

一

【本文】「職の御曹司の西面の立蔀のもとにて」の段

つとめて日さし出づるまで、式部のおもとと小廂に寝たるに、奥の遣戸をあけさせたまひて、上の御前、宮の御前出でさせたまへば、起きもあへずまどふを、いみじく笑はせたまふ。唐衣をただ汗衫の上にうち着て、宿直物も何も、うづもれながらあるうへにおはしまして、陣より出で入る者ども御覧ず。

（第四十七段・一〇六頁一二行～一〇七頁二行）

【三巻本諸注の解釈】

×夜具もなにもいつしよくたになつてあるところにいらつしやつて　（『評釈』通釈）

△宿直物もなにもうづもれながらある、上におはしまして／主上には出御されて。通説には「うづもれながらある上に」と解する。　（『大系』本文／頭注）

△「うづもれながらある上に」と解するのはいかが。「上に」は、上におかせられての意であろう。／夜具も何も、埋まるようにかぶつている。主上には出御されて　（『全講』釈義／文意）

×夜具もなにもまだかたづけていないでそれにうずもれているところへお二人がいらっしゃって

×夜具もうず高くなっている中にお二人は入っていらっしゃって　（『旺文社文庫』現代語訳）
×夜着も何も積み上げたままの私たちのそばへおいで遊ばして　（『角川文庫』現代語訳）
×宿直物なにも埋もれながらある上におはしまして　（『解環』口訳）
・そのちらかった夜具の上に。　（『和泉古典叢書』本文）
×夜具類や何やかや、それらに埋れているわたしたちの方においでになって／「うへ」　（『新大系』脚注）
は不審。通説に従ってほとりと見る。　（『新全集』現代語訳／頭注）
×夜具もなにもかも、（そこにあるものの）中に隠れるようにしている私たちの近くへいらして　（『全訳注』現代語訳）
△天皇におかせられては。　（『新編』脚注）

【批評】

傍線部を含む「宿直物も何も、うづもれながらあるうへにおはしまして」は、「夜具も何も（片付ける暇とてなく）、（やむをえずそれらに）埋もれながらいる（私たち）の上に（帝または帝と中宮が）おいでになって」、さらにいえば、「夜具も何も（片付ける暇とてなく）、（やむをえずそれらに）埋もれながらいる（私たち）を踏んづけて（帝または帝と中宮が）おいでになって」の意にしか断じてならない。「うへに」は英語の「on」に相当することばとなるのだ。しかし、それではどうにも不都合な文章になるので、「ところに」（『評釈』）「中に」（『角川文庫』）「そばへ」（『解環』）

「近くへ」（『全訳注』）といった訳を施してごまかす立場が生じるのだろうが、この文脈における「うへ」をそうした意味に解することは許されない。

そこで、「うへ」を「主上」（『大系』『全講』）「天皇」（『新編』）の意とする見解が出てくるのも必然のなりゆきといえ、後述するようにこの語の解釈としては実はこちらが正解なのだけれども、現本文のままではいかにも無理がある。上文「うづもれながらある」からの接続が唐突になる点、格助詞「に」単独で「うへ」に対する敬意を表すとみるのは不可能で、その場合はせめて「には」とあるべき点、の二つがそう裁定する理由だ。

【本文改訂案】

この問題の解決は、比較的容易ではないだろうか。すなわち、「うへに」は「にうへ」の誤写と考えればよいのである。かなり早期の書写段階において、「emperor」の意だった「うへ」が誤って「on」の意に取り違えられてしまったのであろう。当該箇所の〝復元〟本文とその現代語訳とを示すならば、

◎宿直物も何もうづもれながらある**に、上**おはしまして

〔夜具も何も（片付ける暇とてなく）、（私たちがやむをえずそれらに）埋もれながらいると、帝が（こちらに）おいでになって〕

となる。明瞭この上ない。と同時に、「おはしまし」た人物を一条天皇と中宮定子の「お二人」（『旺文社文庫』『角川文庫』）とみる解釈が間違いであることも確定する。

【参考】

〔三巻本本文〕異同ナシ

〔能因本本文〕異同ナシ

二

【本文】「二月、官の司に」の段

則光、①なりやすなど笑ひて、やみにし事を、上の御前に人々いとおほかりけるに、語り申したまひければ、「『よく言ひたり』となむのたまはせし」と②また人の語りしこそ、見苦しきわれぼめどもをかし。

（第百二十七段・二四〇頁一三行～二四一頁一行）

【三巻本諸注の解釈】

〔①について〕

×則光、なりやすなど／「なりやす」は傳不詳。旁註に「なりまさ」とある。則光同様、清少納言に親しい人物であろう。この話を清少納言が彼らに語つたか、この場に居合わせたと思われる。／則光だのなりやすだのと

（『評釈』本文／頭註／通釋）

・則光・なりやすなど／「なりやす」は未詳。底本の注に済政かとする。能因本「則光なりや」によれば、「則光式ですね」など言って笑ったの意となる。（『大系』本文／頭注）

×則光・なりやすなど／則光やなりやすなどが（『全講』本文／文意）

×則光、なりやすなど／則光やなりやすなどが／底本「なりやす」の傍注に『此名不見』とし、「やす」の右に『まさ歟』と小書。能因本「則光なりや」によると「これは則光式ですね。と笑い話になった事を」の意となる。八十段に則光の歌ぎらいのことが書かれている。清少納言と親しい人達であろう。

（『旺文社文庫』本文／現代語訳／補注）

△則光、なりやすなど／「なりやす」未詳。三巻本勘物には、蔵人源済政の誤りか、とする。能因本「のりみつなりやと」。／三巻本の本文ならば、「なりやす」がはっきりしないにしても、則光やなりやすなどがこの話を一笑に付し去ったことを、の意になるが、その含意を解しがたい。能因本では、これでは、まるで則光同様ね、と笑い話になったことを、の意になろう。（中略）口語訳は、しばらく能因本による。「則光同様」というのは清少納言の批評と、しばらく見る。／まるで則光のような言い分ですことと（『角川文庫』本文／脚注／補注／現代語訳）

×のりみつなりやすると／「（それじゃ）則光になってしまうじゃないの」と（『解環』本文／口訳）

・則光・なりやすなど／▼なりやす　不明。底本傍書「まさ欤」。これだと源済政だが、則光よりあとに記されるのは不審。能本「なりやと（まるで則光ではないかと）。（『和泉古典叢書』本文／頭注）

○則光なりやなど／底本「のりみつなりやす」。能因本により改む。それではまるで則光（歌を嫌ったこと、八〇段に詳しい）ではありませんか、など。（『新大系』本文／脚注）

△則光、なりやすなど／このあたり解きにくい。仮に「則光」と共に「なりやす」も人名と見る。ただし、「なりやす」は未詳。能本「則光なりやと」。則光は橘則光で、八〇段に見えるように歌を好まなかった。それでは、まるで歌を嫌った則光のようだ、の意であろう。（『新全集』本文／頭注）

・「則光、なりやす」など／なりやす　未詳。人名か。能本「なりやと」。（『全訳注』本文／語釈）

・「則光なりやす」など／能本「なりやと」。（『新編』本文／脚注）

〔②について〕

×また人の語りしこそ。見苦しきわれぼめども、をかし。／べつの人が（私に）報告してくれたという後日譚がある。烏滸がましい自讃のかずかずではあるが、ちよつとおもしろいと思う。（『評釈』本文／通釈）

・また人の語りしこそ、見ぐるしき我ぼめどもをかし。／これこそ聞きぐるしい自慢話でおもしろい。「をかし」は能因本「なりかし」。（『大系』本文・頭注）

×また人のかたりしこそ、見苦しきわれぼめども、をかし。／▼をかし　能因本「なりかし」／ある人が話してくれた、これこそ聞き苦しい自慢話だが、おもしろい。（『全講』本文／釈義／文意）

×また人のかたりしこそ、見苦しきわれぼめどもをかし。／▼をかし　能因本「なりかし」。それによれば、であることだ、の意。／帝が（中略）といってくれたが、（こんなことを書くなんて）みっともない（はずかしい）自慢話でおかしい（と思うが）。（『旺文社文庫』本文／脚注／現代語訳）

×また人の語りしこそ、見苦しき我ぼめども、をかし。／▼をかし　能因本「なりかし」。／ほかの人が私に話してく

れたが、みっともない自賛談の数々は、我ながら笑止の沙汰だ。（『角川文庫』本文／脚注／現代語訳）

△又、人のかたりしこそ、みぐるしき我ぼめどもぞかし／あとで、誰かが話してくれたなんてのは、お粗末な自慢話ですわね。／三巻本の本文によれば、「冷淡（餅餤）」の秀句を行成から聞いて、主上がお褒めになったことを他人の口から聞いたと書いた清少納言が、自分の手柄話を披露した自らの行為を「見苦しきわれぼめ」と非難すると同時に、「をかし」と評価したことになるが、それは何としても論理的に甚だしい矛盾を感じさせることである。その意味では、能因本本文に論理的矛盾はないが、筆者は、三巻本の原型本文として、われほめそかし という形があったことを推定するのである。平仮名「そ（字母曽）」と「を（字母乎）」との字形相似は、極めて容易に無意識の誤写による本文転化を導き出すものであるから、「われぼめどもぞかし」から無意識の転化によって「われぼめどもをかし」という誤謬本文が発生し、その文章の論理的矛盾を訂正しようとして、「われぼめどもなりかし」という能因本の改訂本文が生じたと推測するのである。（『解環』本文／口訳／解環）

×また人の語りしこそ、見苦しき我ぼめどもなりかし。／▼なりかし　底本「をかし」、能本による。（『和泉古典叢書』本文／頭注）

×又人のかたりしこそ、みぐるしき我ぼめどもなりかし。／底本「をかし」。能因本により改む。見苦しい自慢話を書いてしまったという反省めいた言葉。（『新大系』本文／脚注）

・また人の語りしこそ、見苦しきわれぼめどもをかし。／また人がわたしに話してくれたのは、見苦しい自慢話は、またそれはそれとしておもしろいことだ。／▼「こそ」の結びが不審。▼「をかし」は能本の「ぞかし」の方が解きやすい。（『新全集』本文／現代語訳／頭注）

×また人のかたりしこそ、見苦しき我ぼめども、をかし。／また、ある人が私に語ったのは、見苦しい自慢話だけれど、面白い出来事であった。／▼ども　文脈からみて逆接に訳した。▼をかし　能本「なりかし」。

（『全訳注』本文／現代語訳／語釈）

・また人の語りしこそ、見苦しきわれぼめどもをかし。／能本「なりかし」。

（『新編』本文／脚注）

【批評】

〔①について〕

まずは、異色の見解を示す『解環』の説明に耳を傾けるとしよう。

偶然にも同じような歌嫌いの人物を二人並べたと見られる三巻本の本文は、既に文章として冗漫であり、内容的には必ずしもあり得べからざる事実を叙述した不純な本文であると考えられる。では、三巻本の原型においては、この疑問個所の本文は如何なる形であったのであろうか。そしてまた、能因本の改訂本文と、三巻本の誤謬本文との共通祖先となり得る原型本文は、如何なるものであったろうか。それを筆者は、次のように推測するのである。

　のりみつなりやするとわらひてやみにしことを

平仮名「る（字母留・累）」と「な（字母奈）」とは、字形極めて相似て、互いに無意識の転化による本文誤謬を生じやすいものである。或いは文法的には、助詞「に」の脱落を仮定して、「のりみつになりやするとわらひてやみにしことを」とあったとすれば、一層解釈は安定して、落ちついた本文となるのであるが、助詞「に」の有無

に関わらず、要するに、清少納言は行成に「それじゃ則光になってしまうじゃありませんか」と笑って、問答を打ち切りにしたと解釈されるのである。能因本の本文は、「のりみつなりやすると」の「する」二字を偶然に脱したか、或いは一たん「のりみつなりやすなと」と無意識に転化した誤謬本文から「すな」二字を除去して、通意の便を計ったかの、何れかによって成立したのであろうが、後者の二段転化に属するものと筆者は考えている。（解環）

「なりやす」を人名と解さず独自の本文改訂を断行した姿勢は評価したいが、この案自体はとても受け入れられるものではない。なぜなら、まず、「のりみつなりやする」の本文が「それじゃ則光になってしまうじゃありませんか」の意味になることはない。やはり格助詞「に」が「のりみつ」と「なりやする」の間になければならないのだ。「助詞「に」の脱落を仮定して」という前提に無理があることは明白といわねばなるまい。さらに、「のりみつになりやする」を『解環』のごとくに解釈することも不可能だろう。この形の本文からは、清少納言が橘則光その人に変身するの意しか導き出せないはずであって、則光同然になるといった比喩表現とは解せないからだ。

結局のところ、三巻本本文でこの箇所を読み解くことは不可能であり、能因本本文を採用（『新大系』）、あるいは事実上支持する立場（『角川文庫』『新全集』）が生まれるゆえんである。なお、『新大系』が改訂に用いた「能因本」本文は現存本文に忠実な形ではないが、その誤認が幸いして、怪我の功名となるのであった。

〔②について〕

「をかし」の「を」を「そ」の誤写（曽→乎）とみる『解環』の説はそのとおりだと考えられる。ただし、この現象

は「無意識の転化」ではなく、『枕草子』の代名詞といえる「をかし」をもって話が結ばれるはずだという書写者の先入観に起因していよう。しかし、「を」を「そ」に改訂するだけでは、上にある係助詞「こそ」の不審は依然解消されないまま残されるのである。この事態は、能因本本文「なりかし」を是として採用しても変わらない。なお、「見苦しきわれぼめども」の「ども」を逆接の意に解する立場（『評釈』『全講』『全訳注』）もあるが、これはまったくの論外。「われぼめども」を「われぼめなれども」の意に解してよい道理はどこにもない。ついでにいえば、『旺文社文庫』の現代語訳に至っては批評のしようすらないし、また、『新全集』の頭注には何らかの誤認があるものと思われる。

【本文改訂案】

〔①について〕

能因本本文「なりやと」の方を原形とみて採りたくなるところだが、『解環』の見解に同じくやはり後代の改変本文と判別するのが妥当かと思う。当該文脈に求められるのが、『新大系』の錯誤を誘発したごとく、引用の格助詞「と」ではなく副助詞「など」なのであってみれば、この箇所は結局、

◎「則光**なりや**」**など**

〔「（それでは、まるであの歌嫌いの）則光ではありませんか」などと〕

の形に〝復元〟するのが最善の処置といえ、「なりや**なと**」→「なりや**すと**」→「なりや**すな**（な）と」→「なりや**すな**と」といった本文転化の過程を想定してみることができるだろう。すなわち、はじめに「な（奈）」が「す（寸）」に誤られて「なりやすと」に変じ、その後「す」の横に校合（「なィ」）あるいは推測（「なヵ」）によって「な」の字が傍記され、こ

れが本文化して三巻本の不審本文「なりやすなと」が発生したとみるのである。

〔②について〕

ここは、「をかし」を「ぞかし」に改めるのみならず、同時に、上の傍線部「こそ」も「も」に改訂されなければならない。「も（毛）」一文字が「こそ（己曽）」二文字に見誤られることは、その逆も含めてめずらしいことではない。ゆえに、問題部分の正しい本文とその解釈は、

◎また人の語りし**も**、見苦しきわれぼめども**ぞ**かし。

〔別の人が（私に）話してくれたのも、みっともない自慢話ですよね〕

となる。参考までに、「AもBぞかし」の構文例を以下にいくつか例示しておこう。

・この若草の生ひ出でむほどのなほゆかしきを、似げないほどと思へりしも、ことわりぞかし

（『源氏物語』若紫巻／新編日本古典文学全集①・二二七頁一〇行～一一行）

・我だにこそはと御心とどめたまへるもありがたきぞかし。（同初音巻／同③・一五四頁六行）

・よそに見放つもあまりなる心のすさびぞかしと口惜し。（同真木柱巻／同・三五四頁一二行～一三行）

・ゆるして見えかはしなどしたまふも、女御の御ための真心なるあまりぞかしと思すに

（同若菜下巻／同④・二一一頁三行～四行）

・しはすの廿九日にまいる。はじめてまいりしも今宵の事ぞかし。

（『紫式部日記』／新日本古典文学大系・二九六頁一二行）

・かの在五中将の、「心の闇にまどひにき夢現とは世人定めよ」など詠みたりしも、かやうのことぞかし。

（『栄花物語』巻第十二・たまのむらぎく／新編日本古典文学全集②・九〇頁五行～七行）

【参考】

〔三巻本本文〕①異同ナシ②異同ナシ／異同ナシ

〔能因本本文〕①なりやと（学冨）②異同ナシ／なりかし（学冨）

三

【本文】「五月ばかり、月もなういと暗きに」の段

頭弁はとまりたまへり。「あやしく①てもいぬる者どもかな。御前の竹を折りて、歌よまむ②とてしつるを、『同じくは、職にまゐりて、女房など呼び出できこえて』と持て来つるに、呉竹の名を、いととく言はれていぬるこそいとほしけれ。誰が教へを聞きて、人のなべて知るべうもあらぬ事をば言ふぞ」などのたまへば、「竹の名とも知らぬものを。なめしとやおぼしつらむ」と言へば、「まことに、そは知らじを」などのたまふ。

（第百三十一段・二四八頁三行～一〇行）

【三巻本諸注の解釈】

〔①について〕

×どうもわからないな、退きあげた連中の気持が。（『評釈』通釋）

・不思議なことに皆いってしまったわい。（『大系』頭注）

・おかしなことに、みんないつてしまつたわい。（『全講』文意）

×みんな行ってしまってへんな者どもだなあ。（『旺文社文庫』現代語訳）

×返事もしないで帰って行くとは、妙な連中だな。（『角川文庫』現代語訳）

×連中は全く妙な具合になって帰って行ったものだ。（『解環』口訳）

・「あやしくても」は次の「いぬる」への先導批評。直訳すれば、合点行かぬことにも、帰ってしまった連中だな。帰ってしまうとは変な連中だ、ということ。（『新大系』脚注）

×去って行った者たちは、いったいどういうわけなのかな。（『新全集』現代語訳）

×返事もせず、行ってしまった者たちの料簡が分からないよ。（『全訳注』現代語訳）

〔②について〕

×歌を詠もうというわけであつたが（『評釈』通釋）

×歌を詠もうとしたところ（『全講』文意）

×歌を詠もうとしたのだが（『旺文社文庫』現代語訳）

○歌詠まむとしつるを／三巻本（絵詞も）「とてしつるを」。能因本により訂す。／歌を詠もうというつもりだったのだが　（『角川文庫』本文／脚注／現代語訳）

△『（上略）歌を詠もう』というわけで、やったのだが／しつる　動詞シは、上文の竹を折るという行為を受けている。　（『解環』口訳／語釈）

・能本「と」。　（『和泉古典叢書』頭注）

△歌を詠もうと思ってしたことなのだが。　（『新大系』脚注）

×歌を詠もうとしたのだが／整わないが、「歌を詠もうというわけで、そのようにした」の意と見る。　（『新全集』現代語訳／頭注）

×歌を詠もうとしていたのだけれど　（『全訳注』現代語訳）

【批評】

〔①について〕

試しに、諸注の訳文を古文に還元してみるとよいだろう。どれ一つとして原文に合致するものはない。その原因が傍線部「ても」にあることは明白で、ここがうまく処理できていないのだ。接続助詞「て」に係助詞「も」が結合した「ても」には、a「も」が上の「て」を強める働きをしている場合、b「も」が逆接的に下に係っていく場合、c「とも」に類する逆接の仮定条件を表す場合とがあるので、「あやしくてもいぬる者どもかな」を強いて現代語に置き換えるならば、順に、a「（あなたの絶妙の応答が）不可解でまあ、（このことを主上にご報告しようと）立ち去った連中で

あることよ」、b「（あなたの絶妙の応答が）不可解であるのに、（このことを主上にご報告しようと）立ち去った連中であることよ」、c「（あなたの絶妙の応答が）たとえ不可解であったとしても、（このことを主上にご報告しようと）立ち去った連中であることよ」とでもなろう。そして、どの場合も「あやしく」感じた主体は、「いぬる者ども」ということになる。しかしながら、いずれも前後の文脈と調和しないばかりか、そもそもそれ自体が奇妙奇天烈な訳文となりとうてい取り合えないのだから、ここではたと困ることになるわけだ。ゆえに、三巻本諸注が頭痛の種となる「ても」と対峙することを避け、およそ原文とかけ離れた訳文をあてがって来たのも、万やむをえぬ処置だったのかもしれない。要するに、現本文「ても」のままではいつまで経っても正しい解釈は得られないのである。

〔②について〕

三巻本の原文に忠実に訳すなら、およそ二重傍線部のようになるだろう。そして、「しつる」の「し」は「上文の竹を折るという行為を受けている」（『解環』）と解さねばならない。けれども、この解釈に従うと、上からの文脈が「清涼殿の（庭の呉）竹を折って、（それを題材にして皆で）歌を詠もうと思って折ったところ」となり、どうにももどかしい。「とて」の「て」を黙殺して、「歌よまむとしつるを」の形に対応する現代語訳「歌を詠もうとしたところ」（『全講』）、「歌を詠もうとしたのだが」（『旺文社文庫』『新全集』）が見られるのも、そうした理由からであろう（『新全集』は、現代語訳と頭注の説明が食い違っている）。そこで、『角川文庫』のように「としつるを」の本文をもつ「能因本により訂す」という立場が生じてくるのである。

【本文改訂案】

〔①について〕

上述の不審を孕む「ても」は、「もて」が転倒を起こして生成した転化本文ではないかと思う。「もて」とは時間の継続を表す「以て」ではなく、手に持つ意の「持て」である。すると、頭の弁藤原行成の最初の発言は、

◎あやしく、**持て**去ぬる者どもかな。

〔（私にはまったく）解せぬことに、（わざわざ用意した呉竹を所期の目的も果たさずに）持ち去ってしまった連中であることよ〕

だったことになり、すっきりと読めることになる。これならば、後文の「『同じくは、職にまゐりて、女房など呼び出できこえて』と持て来つるに、呉竹の名を、いととく言はれていぬるこそいとほしけれ」、すなわち、せっかく清涼殿の呉竹を折ってここへ「持て来」たのに歌を詠む目的も果たさないまま持って「いぬる」ことを残念がる行成の心情ともぴったりと呼応するし、用語の面でもみごとな呼応関係を形成することになる。本節引用本文直前に、源頼定らが呉竹を持ち帰った記述は見られないけれども、清少納言の「おい。この君にこそ」という『晋書』王徽子伝を踏まえた当意即妙の応答を、「いざいざ、殿上に行きて語らむ」と立ち去った彼らであってみれば、その手には再現のための〝小道具〟が握られていたとみなければなるまい。

ところで、「持て～」の形をもつ複合動詞の割合としては、「持て来」「持て参る」が断然多いが、「持て去ぬ」の用例も、

・ちりばかりの物も残さず、みなもていぬ。

（『大和物語』第百五十七段／新編日本古典文学全集・三九三頁三行～四行）

・さきざきかやうのことは言ふものをと苦しけれど、せめてたまへば、いとほしうて持て往ぬ。

（『源氏物語』少女巻／新編日本古典文学全集③・六五頁九行～一一行）

・鬼や食ひつらん、狐めくものやとりもて去ぬらん

（同蜻蛉巻／同⑥・二〇九頁一行～二行）

のごとく確かに認められる。「ても」の原形が「もて」であること、もはや議論の余地はないであろう。

〔②について〕

低部批判の手法によるならば、ここは能因本本文の方を祖形とみてこれを採るのが正解ということになろう。三巻本・能因本の共通祖本本文を後者のみが正統に継承したものといえなくもないからだ。しかし、先にも少し述べたように能因本には後世の合理的改変を匂わせる箇所が散見されるため、結果は同じであっても、推測批判の見地に立脚して三巻本本文の「て」を衍字と判断しこれを削除するのが、手続きとしては正しいのではなかろうか。

◎歌よまむ**と**しつるを

〔（それを題に）歌を詠もうとしたのだが〕

草仮名の「し（之）」と「て（天）」は間違われやすいので、たとえば、「と**し**つるを」→「と**て**つるを」→「と**て**（し）つるを」→「**とて**しつるを」などの書写過程を経て、三巻本のような形の転化本文が誕生するに至ったのであろう。また、私見と同様の推断のもとに能因本本文が発生したものと考えられる。

【参考】

〔三巻本本文〕①異同ナシ②異同ナシ

〔能因本本文〕①異同ナシ②よまむとしつるを（学富）

四

【本文】「故殿の御服のころ」の段

前栽に、萱草といふ草を、籬結ひて、いとおほく植ゑたりける。花のきはやかにふさなりて咲きたる、むべむべしき所の前栽には、いとよし。

（第百五十五段・二八三頁）

【三巻本諸注の解釈】

×花がくつきりと、ふさふさして咲いている感じは／ふさふさとたくさん。（『評釈』通釋／頭註）

△花がくっきりと房になって咲いているのは、（中略）「ふさなりて」の語は不審。／「ふさなりて」は三巻本・能因本いずれも一般にこうあるが、中に「ふさかりて」（三巻本中の中村秋香本）、「かさなりて」（能因本中の慶安刊本）の異文があり、「ふさなり」の語の不審に応じる事実として注意される。（『大系』頭注／補注）

△花がくつきりと房になつて咲いているのは／「ふさかりて」「かさなりて」の異文があるが、このままとすれば、

ふさふさとしての意か。（『全講』文意／釈義）

×花がきわだってならんで多く咲いているのは／「ふさ」は、多く・たくさん、の意で副詞。（『旺文社文庫』現代語訳／脚注）

×くっきりした色合いでぎっしり咲き垂れているのが／「其一穀含二数十粒一離々結レ房」の注に「離々読二布佐奈流一」とある（和名抄、大角豆）。（『角川文庫』現代語訳／脚注）

×花が、あざやかにかたまって咲いているのは（『解環』口訳）

×鈴なりについている。「大角豆…其一穀含数十粒、離離結房〈離々、布佐奈、布佐奈流ト読ム。文選ニ見ユ〉（和名抄）。「総〈フサナル、総茎、フサツク〉」（字類抄）。（『和泉古典叢書』頭注）

×あざやかな色で一ぱい咲いているのは。（『新大系』脚注）

×花がくっきりと房になって咲き垂れているのは／「ふさなる」は『和名抄』大角豆の「其一穀数十粒ヲ含ミ、離離房ヲ結ブ」の注に「離離ハ布佐奈流ト読ム」とあるのを根拠として、ぎっしりと房になって実や花が垂れ下がるの意とする説に従うべきか。「離離」の用例は『詩経』小雅に「其実離離」とある。（『新全集』現代語訳／頭注）

×花が鮮やかに房なして咲いているのは／房のように多く花をつけて。『和名抄』に「離離ハ布佐奈流ト読ム」とある。（『全訳注』現代語訳／語釈）

×房状に、鈴なりに。漢語の「離離」。（『新編』脚注）

【批評】

萱草の花は、「総なりて」＝たくさん生って咲くことも、「房なりて」＝房状になって咲くことも絶対にない。この世のどこに、そのような「萱草といふ草」があろうか。だから、「ふさなりて」は紛れもない不審本文なのであって、これをまともに相手にしてみたところで、はなから無駄に決まっているのだ。

さらに、ここではっきりさせておきたいのは、『和名抄』や『詩経』の記事を持ち出してきてもっともらしい説明を加える諸注の欺瞞。なぜなら、これらの文献に見える「離離」は、いずれも花ではなく実が「布佐奈流」ことを表す語としか解せないからだ。これは、明らかなすり替えであって、このような見当違いの注は直ちに放棄されねばならない。「萱草といふ草」に実がたくさん、または実が房状になって生るのならまだしも、そもそもの話、萱草に「実」が生ることはないのだから、まったく何をかいわんやである。

【本文改訂案】

傍線部本文はもともと、

◎花のきはやかに**か**さなりて咲きたる

〔花がくっきりと鮮やかで（花びらの上にまた花びらが）重なって（八重に）咲いている（その）様子は〕

であったものが、「か（加）」→「ふ（不）」の誤写によって発生した転化本文に相違ないと考えていたので、『大系』や『全講』の注を見て驚いた。そこでさっそく確認したところ、近世以降の流布本の原点といえる慶安二年（一六四九）整版本の本文は、確かに「か」（字母「加」）さなりて」となっている（第五冊・九ウ／九州大学図書館支子文庫蔵本）。

さらに、三巻本に席捲されるまで長い間多くの読者に親しまれた、北村季吟の『枕草子春曙抄』の本文もまた「か（字母「加」）さなりて」である（『北村季吟古註釋集成4　枕草子春曙抄』新典社、昭五二）。慶安版本は能因本本文をベースにしてはいるものの、独自の改変箇所も多く含まれており、ここもその一つと考えるのが妥当なのだけれども、論理的にはこの形こそがあるべき本文の姿なのだ。

さて、現時点で最新の注釈書である島内裕子『ちくま学芸文庫　枕草子』上・下（筑摩書房、平二九）は、『春曙抄』を底本にしたもので、右の部分を「その赤や黄の花が、はっきりと際だって、しかもたくさん重なるように咲いている」と訳しているが（下・一二四頁）、折角の「かさなりて」をこのような方向で解釈するのは的外れといわねばならない。なぜならば、この文脈における「重なる」は、花弁の上に花弁が「重なる」ヤブカンゾウの八重咲きの様を描写したことばとみるべきだからだ。換言するならば、この語が用いられていることによって、清少納言がおそらく初めて見た「萱草といふ草」が、一重のノカンゾウではなく八重のヤブカンゾウだったことが特定できるわけである。

【参考】

〔三巻本本文〕異同ナシ

〔能因本本文〕異同ナシ